

平成24年度 越谷市民文化祭 第44回

平成24年11月22日(木)～25日(日)
10:00～19:00(最終日は18:00)

郷土研究の部・展示作品紹介

於 越谷コミュニティセンター 大ホールホワイエ

◇周りの10個の輪は、昭和29年(1954)11月3日に

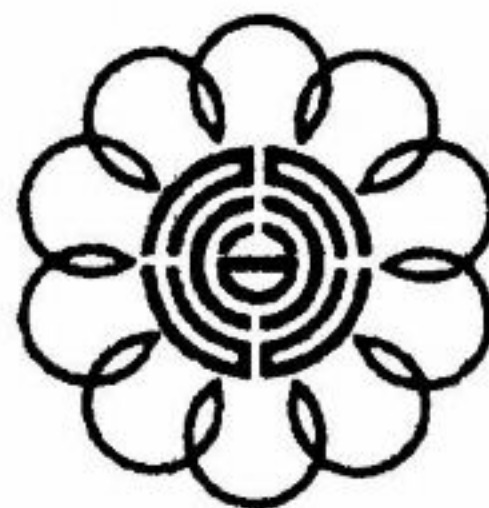
合併した十町村である二町八ヶ村(「越谷町」誕生)を表す。

ちょうせん ちしがやまち おおさわまち さくらむら にいがたむら
十町村とは、越ヶ谷町・大沢町・桜井村・新方村・

ましはやしむら おおふくろむら おおしまむら まわむら がもうむら おおさがみむら
増林村・大袋村・荻島村・出羽村・蒲生村・大相模村

をさす。

◇中央部周りのデザインは、カタカナの『コ』を4個集めた
ものである。つまり、越谷の『越』(「コ4」)を意味する。



◇中心部のデザインは、越谷の『谷』の文字を図案化したもの
である。

◇昭和30年(1955)11月3日には、草加町に合併して
かわやなぎむら いはら むぎつか うわや
いた川 柳村のうち、伊原・麦塚・上谷が越谷町に入る。

◇越谷町は、昭和33年(1958)11月3日に市に昇格し、
越谷市となり、現在に至る。

1. ぎょうだい様建碑の経緯について
2. 知られざる B29 の綾瀬川周辺墜落
3. 宝永の富士山噴火、その時越谷は
4. 越谷の張子

大谷 達人
加藤 幸一
金子 寛
高崎 力

5. 越谷型青面金剛像庚申塔
6. はとバスが越谷市内を走る
7. 二百年前の越谷、俳画の世界

栗野 秀明
原田 民自
宮川 進

NPO 法人 越谷市郷土研究会

1. ぎょうだい様建碑の経緯について

大谷 達人^{たつを}

日光道中の内、蒲生茶屋通りの元大熊仁兵衛屋敷前には、宝暦七年^{一七五七}丁丑歳六月に造立され、「ぎょうだい様」とも「行者様」、「お釜様」などと呼ばれた、一見奇怪な形相の彫像が現存する。塔高は二・三m(像高一・二m、台高一・二m)あり、正面の台石に「砂利道供^(兼)狼」と彫り、胸に龕灯^{がんとう}を具える石塔だが、建碑に至る背景と像形の真相を探歴してみた。

宝暦七年五月に起きた出水(洪水)は、関東一円の水害であったという^{註2}。越谷地域では、西方村『旧記』に、四月中からの永雨^(長)と五月初旬の暴風雨で利根川通り川俣で堤防が決壊し、怒濤のような大水が押し寄せ、新方領耕地は残らず冠水。さらに綾瀬川の堤防が各所で破堤したため、堤防を補強する下流村々と、堤防を切り崩して水の滞留を防ぐ上流村々との争いが方々で勃発した。この災害で海道^{日光道中}の往来が途絶し、越ヶ谷宿^{いち}の市の米価は著しく急騰したと誌^{註3}している。

同様の記述が幸手領外国府間村(幸手市)の『吉羽家文書』にも見られる。水勢が強く日光道中に深さ五尺^{一・五m}から一丈余に及ぶ水丈の押堀^{おっぼり}や池成^{いけなり}ができ、人馬の歩行が出来ない。そのため百姓の田舟を使って荷物等を運んでいる^{註4}。また、刈取り前の麦は萌芽^{もが}り田植用の稲の苗も損失。外国府間村では、被災者を救済するため、日光道中の普請に従事させ人足賃を給した。社会的弱者である老人・子供までが半人足として働き日銭^{註5}を得て、大水後の生活の糧を得ていたという(幸手市史)。

羽生領志多見村(加須市)の『松村家日記』に水害の程度が見られ、小林村(菖蒲町)などは田畠共に大損、苗は一円腐り、真名板・関根等(共に行田市)でも苗は大腐り、羽生辺も同様。寺ヶ谷戸村(加須市)の田の上水は七く八尺、畠は五く六尺、床上二く三尺、栗橋町は老丈九尺^{五・七m}の水丈、関宿は式丈^{六m}、関宿城の御門は三ヶ所で破失、幸手は刈置の麦が全て浮流される。粕かべ^{粕壁}(春日部市)も大方その通りなどと著している^{註6}(埼玉県史)。また

「八甫村諸記録写」(鷺宮町)に、「出水に付き新田切れ所堤廻り築き堤敷に成る分」^{一八四六坪}六反一畝一六歩、他に堤外地の池になった分^{六七六坪}二反六畝一〇歩を書き上げている(埼玉県史)。

ぎょうだい様には、寄進村名として八条領三十四ヶ村、谷古田領十五ヶ村、赤山領五ヶ村、越ヶ谷領五ヶ村、岩槻領五ヶ村、新方領十一ヶ村の七十五ヶ村を刻む^{註7}。日光道中の改修工事に係わり、外国府間村と同様に生活の糧を失った村民の多くに応急的な救済策として、賃雇いの場を設けたのであろう。

日光道中は五街道の一つで幕府の管理下にあったが、蒲生村周辺は以前からの慣例によつて自普請^{註8}とされ、地元民が負担を担わされた。そのため、碑文には、常州・野州・総州・江都の住人や、瓦曾根村中村彦左衛門、登戸村濱野徳左衛門、四条村飯島久兵衛、當所(蒲生村)中野弥三郎などの造塔者及び大願主蒲生村名主大熊仁兵衛などの名が見られ、地元の豪農ばかりか随分と遠方からの寄附者^{註9}を募っている。日光道中の速やかな復

旧を求める人たちであろうが、砂利を敷設した頑強な道を造成する大事業のため、寄付者は勿論だが事業に従事する者も大いに鼓舞せねばならず、顕彰する供養碑を早急に建てる必要が生じたのであろう。

ところで、ぎょうだい様とは、験を修める行者(様)を尊称して「行台様^{註9}」と表わしたようだ。お釜様も同義であつて、修験者(山伏)が家々に配る御札^{註10}荒神様や愛宕様^{註11}、秋葉様などの火伏札は、竈近くの柱に祀ることから生じた呼び名だといわれる。

行者は、村人と信仰を通じて深い繋がりを築いていた。願主と共に名を連ねる法師速成や同貞薩らの進言によつてか、修験宗の元祖といえる役小角^{えんのおづぬ}の護法である烏天狗を真似て、容姿を隣村金右衛門新田の石工竹田平八に彫^{註7}らせた。廻国聖の仏師で修験僧の円空も同様の作品を多数遺している。荒行や山^{さん}壑^{がく}で培った強靱な軀を挺して、民衆の所願成就を遂げんと努める行台様。現在では屋根のない覆堂^{註13}内に納まり像の全容が見られず残念だが、その御姿は、何時の頃からか足腰の病に御利益があると崇拜されて今に伝わる。

註1. 竈灯 一般には仏壇や厨子の灯明を指す。竈^{がん}は岸壁や仏塔の下に彫り込んだ室^{むろ}を云い、中に仏像や宝物を安置する。自然の丘陵の岸壁に彫刻された磨崖仏に同様のものが見られる。

註2. 宝曆7年の水害 『埼玉県史通史編4』近世2第三章農村の疲弊と社会の動揺。

註3. 西方村「旧記貳」『越谷市史統史料編(一)』

「宝曆七丑年 丑五月出水心得方之事

右は去四月中水雨、殊ニ五月朔日六日迄大雨降り続東辰巳風にて雨ふる事昼夜桶よりまけるごとくにして、七日朝より天気よし、依之田の草取ニ出ルと言へ共、六日夜中上手耕地水の出ル事大海のごとく、すわ大水とてあわてゝ取テ返しゆかの仕度坏致スと言へ共、大川通りは多分之事もなし、然ル共二日夜水番人足付置候所、七日朝水増方致候ニ付、村中不残罷出谷古田坊瓦曾根落以迄巻畦仕立候處、明俵千五六百俵余遣申候、扱上手耕地之出水ハ綾瀬川蒲生本郷宮押切候由風聞致申候得共、元は味沼用水瓦吹渡井押切水平押ニ参り候由、尤水上村々々千人程参り共其懸り之役人衆江防方立切り候由、隨て当地は葛西用水東土手ニて巻畦仕防候處、又水上村々々切ニ参ル事日々夜々滞なく、依之西方村伊原村申合番人大勢付置右番情音次第二村中欠出ス事度々ニ及、然ル共無職ニて当村坏備足仕候

一扱又利根川之出水は戌年出水より五尺程高キ由ニ候得共、戌年以来堤通り上置腹付御普請出来候ニ付切所越所等無之候、尤自水之上ニ二番水にて川俣切所出水候由、八日九日二聞へ候得共、道法遠方ニて大場へ押開候故か利根川添通り惣押、尤大水ニハ無之候得共草稻時分故水腐相成り申候

一扱利根川と元荒川之間は不残水冠ニ相成水腐仕候、尤麦は取上申候由

〽(中略)〽

一下野国飛脚便ニ承候所、山々之砂大分ニ押出ス事戌年之ごとく、田畑荒地多分ニ相見へ申候由、押出候砂之高サ麦補見へつかくれつ之由承り候

〽(中略)〽

一五月七日水前相場五月二日市米兩ニ八斗八九升九斗、五月十二日市兩ニ七斗四五升、同十七日市兩ニ七斗、同廿二日市兩ニ七斗五升ニ引下ケ申候、(後略)〽

註4. 吉羽家文書(幸手市史) 「乍恐以書付奉願上候 日光道中之内長百間余 押堀池

右は此度出水ニ付当村地内川辺領圍堤押切申候處、水勢強ク御座候ニ付書面之通往還之押堀或は池成、当時水丈五、六尺より老丈余口御座候場所之人馬歩行相叶不申候、仍之歩行之者御荷物等百姓田舟

を以通路仕候、(以下略)

註5. 吉羽家文書(幸手市史) 「(前略)夫食拝借御貸渡シ被成シ下、身命相続仕難有奉存候、其外男女共ニ出情仕、賃日雇等ニ而漸々取続罷有候、尤村方御普請御願申上候場所数ヶ所御座候間、右御普請等相初り候ハ老人・子供之養ニも罷成可申候と奉存候処、御普請一向無御座候得は、是以心当而違、難儀至極仕候(後略)」

註6. 埼玉県史 資料編十三近世4第四部水害(前略)一、小林村など田畠共二大損、苗ハ一円くさり申候しと談吐也、(中略)一、真名板・関根等苗大きくさり也、羽生辺も左様な也、(中略)一、寺ヶ谷戸村田ノ上水丈七八尺畠上五六尺床上式三尺也、是ニハ高下有之由、田畠共ニ皆無ニ可成由、(中略)一、栗橋町老丈九尺之水丈之由、一、関宿式丈ノ由、矢くら損候由咄也、関宿御城ノ御門三ヶ所破失候由、一、幸手ハ刈置麦野ニテ皆浮流、

註7. ぎょうだい様石碑 台石四周の銘文(加藤幸一氏解説文引用) 正面「日光道中 砂利道供養」、左面「于時寶曆七丁丑歳六月大吉日 常州大泉村 神山藤兵衛 野州田野村 添谷源右衛門 下総国古河村 高橋喜平次 江戸芝片門前 南部屋八十次 江戸北八丁堀 新井屋七兵衛 瓦曾根村 中村彦左衛門 登戸村 濱野徳左衛門 四条村 飯島久兵衛 當所 仲野弥三郎 武州埼玉郡八条領 蒲生村 大願主大熊 仁兵衛 元願主法師速成 助人法師 貞薩 同 鈴木新左衛門 同 仲野茂七 蒲生村中」

右面「寄進村々 八条領 瓦曾根 登戸 西方 伊原 麦塚 東方 見田方 南百 四条 別府 千疋 柿ノ木 八条 鶴曾根 二丁目 木曾根 川崎 青柳 立ノ堀 後谷 柳ノ宮 西袋 伊草 松ノ木 小作田 上馬場 中馬場 大原 大曾根 浮塚 伊勢野 大瀬 古新田 垢村 谷古田領 槐戸 中曾根 篠葉 北谷 花栗 原村 小山 峯村 新堀 苗塚 市右衛門新田 彦右衛門新田 上中谷塚 下谷塚 瀬崎 赤山領 九左衛門新田 新兵衛新田 清右衛門新田 長右衛門新田 藤兵衛新田」

裏面「越ヶ谷領 越ヶ谷町 大間野 神明下 荻島 袋山 岩附領 越巻 谷中 四丁野 西新井 砂原 新方 領 小林 花田 大沢町 大房 大林 大里 上間久里 下間久里 弥十郎 川崎 向畑 供養 佛餉 寄進 金右衛門新田 七左衛門村 松伏 大吉 下赤岩 増林 末田 野島 小曾川 幸手町 粕壁町 石工 金右衛門新田 竹田平八」

註8. 自普請 江戸時代の普請事業には、①御入用普請(御普請)、②御手伝普請、③国役普請、④自普請などがあるが、①は材料他を幕府が負担。②は幕府の命で諸大名が負担。③は、国単位に課税した経費で負担。④は百姓役普請とも称し村々が負担。実質は結による無償の相互扶助形態をとっている。蒲生村周辺の日光道中の修復は日光道中宿村大概帳(幕府編纂資料)に村々の自普請と記す。

註9. 行台様 「行」は仏道を修行する人。即ち修行者で一般には修験者の身成をした人。その振舞(挙動)を德行という。「台」は徳行者への敬称で尊台の意。また「うてな(臺)」は高殿を示し、高く積み上げた台を顕す。行台様は民衆の安穩を高楼から見晴らせるように造営された。

註10. 荒神様 三宝荒神の略。民間信仰として全国的に浸透。屋内に祀られる荒神は、一般に火の神・竈の神とされ、屋外の場合は、屋敷神・地域神・一族の氏神として祀られるが、共に農耕的な信仰を帯びる。日本古来の荒振神の思想を背景にして陰陽師の類が説き、そこに神道や密教系の仏教との習合によって修験者等が広がりやをにせ、民衆の生活の中に生きてきた。

註11. 愛宕様 防火の守護神として崇められ、愛宕権現として知られる。記・紀では迦遇突知神とか火産靈神と称し、京都市右京区嵯峨の愛宕神社を本社とする。

註12. 秋葉様 静岡県犬居領家の秋葉神社を本社とし、祭神は火之迦具土神。現在は秋葉山本宮秋葉神社を正式名とする。俗称は秋葉大権現といい、古くから仏教と習合し講組織による参詣で全国に拡がる。

註13. 覆堂 三拾年ほど前、痛風を病んだ息子の症状が芳しくないため、母親が行台様に祈願したところ無事快癒した。そのお礼に、風雨や寒暑から護るお堂を建てた。その時、石像とはいえ胴体の彫り方が羽毛の様に見えたので、鳥の様に空を自由に飛び回れるように屋根を外したという。今でも足腰の悪い人がお参りし、草鞋を供える風習が続いている。

ぎょうだい様(砂利道供養塔)



写真提供者 和田尚之氏、藤川吉洋氏、原田民自氏(越谷市郷土研究会員)

愛宕大権現立像

蓮田市 個人 県指定文化財

像高四八・五cm



護法神像
さいたま市 個人
像高二九・三cm

田空仏



秋葉大権現・両脇侍立像
蓮田市 個人 県指定文化財
像高四二・八cm、三一・二cm

2. 知られざるB29の綾瀬川周辺墜落

加藤 幸一

東京への最初の空襲は昭和十九年十一月二十四日である。B29が越谷と草加の境を流れる綾瀬川の周辺に落ちたのはその約一ヶ月後のことである。このことは、現在、大間野五丁目二〇〇に住む関根弘良氏が、父、良男氏（昭和四年九月生まれ、屋号「よしずや」）から「高度一万メートルを飛ぶB29が暮れに落ちた」と聞いた話からも明らかである。「パラシュートで、若いアメリカ兵たちが降りてきた」という。その中に女性兵士が一人含まれていた。今では、その事実さえ忘れ去られようとしている。

「昭和十九年に、B29が撃墜されて、綾瀬川に架かる旧赤山街道沿いの一ノあじ橋（※1）の南東の草加の地に墜落した。その場所は、長栄町の蓮田の中であつた。その時に空中で分解した一部の部品の尾翼が、綾瀬川の北側、現在の越谷市大間野の田んぼの中に斜めに突き刺すように落ちていた。」

以上が、春日部市に住む男性からの証言である。小学校低学年の頃、自宅（現在の春日部市）の庭先にある防空壕で、飛行機が火の玉になって、南から北の自分の住む所に向かってあたかも落ちてくるように見えたのを目撃している。当時は、落下地点がここから余り離れていない所に落ちたように思えたという。大間野側に落ちた尾翼の長さはおよそ十五メートル、厚さは一メートル弱、幅は三メートル弱と記憶している。

さらに、後になって当時の地元の人々から聞いた話によると、「大間野側の地に四〜五人か五〜六人のアメリカ兵が降りてきた。生き延びるために自活ができるようにとの配慮からか、釣り竿を携えていた。地元の人々によって取り押さえられてからは、どこかに連れて行かれたようである。また、長栄町側に落ちたB29の本体の中にも人がいたようである。」としている。

大間野側の地に住む男性（昭和二年生まれ。元、越谷市郷土研究会の会員）によると、「大間野に降りてきた複数のアメリカ人が、日本の憲兵らしき人によって貨物トラックの荷台に載せられてどこかに連れて行かれたのを見た」という。

当時のB29の空襲のコースは、中島飛行機武蔵野製作所（現、武蔵野市）を爆撃し草加あたりを通って帰還する。この時、一万メートルという高高度を飛んでいる。翌年二月の硫黄島陥落後は、硫黄島や空母から戦闘機が来襲し、高度二〜三〇〇〇メートルとなっていたようである。綾瀬川周辺に落ちたB29は、中島飛行機武蔵野製作所の爆撃の帰りで、高度一万メートルを飛ぶB29を高射砲（昭和十九年の夏頃までは高度八千メートルまで届くのが限界と言われていた）によって奇跡的に撃墜されたのではないだろうか。

現在、その該当するB29の墜落の記録がどこにもなく、日米のそれぞれの公式文書から漏れた可能性がある（※2）。

※1 現在は、本来の「一ノあじ橋」の呼称から「一ノ橋」と短縮して呼ばれている。

※2 川口上空での墜落の記録が三件あるが、草加市や越谷市での記録はない。

昭和二十年三月十日、川口市青木町芝川公園内 赤羽の高射砲による。

昭和二十年四月十四日、川口市原町 対空砲火。

昭和二十年五月二十五日、川口市安行に墜落 保木間の高射砲による。

3. 宝永の富士山噴火 そのとき越谷は

金子 寛

宝永四年十一月二十三日（一七〇七年十二月十六日）午前十時、富士山は南東側の山腹（六合目付近）を突き破って大爆発を起こし、南関東一円に大量の火山灰や火山礫（古文書では焼け石、焼け砂）を降らせた。その総量は岩石と同じ密度に換算して〇・六八立方キロに及び、東京ドームの約五百杯分、一九九〇年代の雲仙普賢岳噴火の全噴出量の約三倍に相当するものだった（宮地直道「富士を知る」）。

折からの偏西風により、降灰は百キロメートル以上離れた栗橋、幸手付近までに及んだことが山形庄内藩の江戸へ向かう飛脚からの報告で知ることができ、火山鳴動が福島の本松まで及んでいたことも記されている。越谷領越巻村（現在の新川町）には、承應三（一六五四）年から現在まで書き継がれている「産社（うぶぢや）祭礼帳」という文書があり、宝永四年の項に、例年、祭礼の期日、当番者の氏名のみの記載だけであつたのが「大砂降ル 三寸ほど」と具体的な数字の入った降灰の貴重な記録が残されている。また、八潮の八条領西袋村（現在の八潮市大字西袋）の名主の家に残る古文書によると、噴火発生後、幕府がどこでどのくらいの降灰があつたかどうかの調査依頼を行っていたことが分かっている。

噴火と地震の関係であるが、この宝永噴火が起こる四年前の元禄十六年十一月（一七〇三年十二月）に、突き上げるような強烈な地震が南関東を襲っている。これが元禄地震で、震源は房総沖、震度はM七・九（八・二と推定され、江戸から小田原にかけての東海道沿いに大きな災害をもたらし、さらに房総半島沿岸に大津波が襲来し、大きな災害をもたらした。越谷でも「袋山細沼家文書」に、元荒川の堤が破損、改修についての願い書が地元から出されている。この地震の四年後、まさに富士山噴火の四十九日前の宝永四年十月四日、元禄地震を上回るM八・四の宝永地震が東海から紀伊半島、四国の太平洋沿岸まで広範囲に襲っているのである。

歴史時代になってからの主な富士山噴火活動の記録は別表の通りである。内、大噴火は八百六十四年の貞観噴火とこの宝永噴火であり、これを最後に三百年余り富士は沈黙している。

宝永と同じような規模の噴火が起こった場合、別表のような降灰予想分布図が「富士山ハザードマップ検討委員会」から発表されており、越谷での降灰も二〜十センチの範囲内に入っている。ひとたび噴火が起これば富士山周辺だけでなく、国の中枢部である神奈川、東京、千葉、埼玉などに甚大な影響を及ぼすことが読み取れる。

展示の内容 (B4版) 全七枚

- 一 鶏肋編 卷六九、卷百五十 各一 山形県史 資料編六 同解説文
- 一 産社祭礼帳 越谷市史四 史料二二 同解説文
- 一 御用向旧記 八潮市史 史料編 近世五 同解説文
- 一 宝永噴火の概要
- 一 富士山の有史以来の主な火山活動 富士北麓住民ガイドブック
- 一 降灰予想分布図 富士山ハザードマップ検討委員会2004

「鶏肋編卷百五十より」

一同亥霜月廿三日駿河三十度程地震同日より同廿六七日頃迄於江戸砂降三寸程溜り申候是ハ右同日富士山ノ中辺より焼出如斯ニ候よし富士近所ニ而ハ百匁ほどの小石交りの砂降家を埋申候程のよし其節ハ十日計の内昼夜を不分闇く震動いたし二本松辺迄も聞へ申候よし砂ハ猿手辺迄降申候地震の節ハ江戸も少々降り申候よし

(山形県史 資料編六 鶏肋編下)

これは庄内藩国許で記した富士山噴火の様子の一部である。応永の噴火は爆発的噴火であったため、空気振動が福島の本松辺りまで伝わったこと、降灰は猿手(幸手)辺りまであったと書いている。「幸手市史」によれば「幸手」は「去手」、「猿手」などと記されたことがあるという。

『鶏肋編』

庄内藩の致道館司書、加藤正従(一八三四年没、六十四歳)が三十数年がかりで収集、筆写した藩主及び藩政を中心とした庄内の古文書の集録。庄内の史料としては最も優れたものである。

「鶏肋編卷六十九より」

覚

一霜月廿三日午ノ中刻震動有之戸障子鳴ル其間半時程也未ノ刻南東より霊(異か)雲起り西北ハ晴天その際日々うつり殊の外光り諸人目を驚カス且以雷なり右之雲西北之方ニ覆イ同中刻より灰降ル其色鼠色也降初ニは雷かと存候身にかゝり灰を見候へハ灰ニ而御座候夜ニ入候而は黒キ焼砂ふる戌刻晴ル然共南東之方ニ黒雲有暮より翌明方迄震動不止戸障子ニ聞キ鳴動キ夥敷諸人夜中目を不合

一同廿四日南東に黒雲如前午刻少々鳴動未ノ中刻自庄内御飛脚着道中様子承候得ハ昨晚栗橋より灰降に逢候由申候跡之儀ハ如何御座候や不存旨申候夜ニ入西ノ中刻余程地震有之並夜中少々震動雷折々鳴り丑之刻少々地震有之右ハ伊豆之大嶋ノ山焼ル共申候

(山形県史 資料編五 鶏肋編上)

これは庄内藩江戸屋敷に勤める峰岸忠右衛門という藩士が宝永の噴火について書きとめたもので、国許(鶴岡)から来た飛脚が栗橋辺りで降灰に遭遇したと語ったことが記されている。この頃、庄内藩は江戸と国許(約百二十里九丁)の間に、月三度の飛脚を使っていた。いわゆる三度飛脚で、およそ七日間を要したと言われている。

「産社祭礼帳(うぶしやさいれいちょう)」

宝永四年亥二月五日

嶋村 六郎右衛門

同断 鋪野 弥兵衛

此年十一月大砂降る

(越谷市史四 史料二)

綾瀬川に面した大字越巻村中新田(現在の新川町)に、承応三年(一六五四)から現在まで書き継がれている「産社祭礼記録帳」がある。その内容は承応三年以降施行されてきた産社祭礼を中心とした記録であるが、初めの内は祭礼執行の期日、執行に際しての集物そして年番にあたった番者の氏名のみが連記されていた。この間、特別な変革等の記録が簡単に付記されていることもあるが、享保期(二七一五)以降は年内に発生した顕著な事暦が豊富に集録されている。この記録の宝永四年に右のような文書がある。

祭礼の期日が宝永の四年には二月五日(九日か)であり、年番にあたった当番者が嶋村六郎右衛門および鋪野弥兵衛の両名で、この年に発生した特別な出来事として噴火による降灰が十一月にあったことを記録している。三寸即ち七く八センチだが大量の降灰である。埼玉県下の噴火の記録に具体的な数字が出てくるのはこの越巻村の産社祭礼帳だけであり、貴重な記録である。

注記・嶋村、鋪野は近世初頭の越巻村新田開発における最初の移住者。

「御用向旧記留帳」

去ル廿三日富士山焼候ニ付江戸表焼砂降候、就夫近在之儀もいつれの村迄砂灰降候哉、尤降留り候を厚サ何程有之哉可申上旨江戸より申来候間、其元村々江何日より砂降候而厚サ何程溜り候と申儀、此廻状之村下ニ付紙致右之分書付名主名所記印判いたし可被相返候

九月廿七日

清太夫

(八潮市史 史料編近世II)

江戸後期の寺子屋師匠で、八潮西袋村(現在の八潮市西袋)の名主であった小澤兵右衛門(一七八六―一六五五)が集めた書物や絵図類が「綾瀬館文庫」として残されており、その中の「御用向旧記留帳」の宝永四亥年にこの文書がある。これは宝永噴火の後、村々に降灰の状況(降灰の有無、場所、厚さ)を調べて報告提出するよう名主宛幕府からの調査依頼である。幕府は富士山周辺の災害復旧に追われる中、江戸周辺の災害調査にも着手していたことがこの文書から知ることが出来る。(清太夫)は八条領の名主名、九月廿七日の日付はおそらく書き写した際の誤記だろう。このような降灰調査がどの範囲まで実施されたのか、又、「産社祭礼帳」に記されている降灰記録と越巻村にもきたであろうこの調査依頼との関係は不明である。

覺

一霜月廿三日午ノ中刻震動有之戸障子鳴ル其間半時程也未ノ刻南東より靈(異か)雲起り西
北ハ晴天その際日々うつり殊の外光り諸人目を驚カス且以雷なり右之雲西北之方ニ覆イ同
中刻より灰降ル其色鼠色也降初二は雷かと存候身にかゝり灰を見候へハ灰ニ而御座候夜ニ
入候而は黒キ焼砂ふる戌刻晴ル然共南東之方ニ黒雲有暮より翌明方迄震動不止戸障子ニ闇
キ鳴動キ夥敷諸人夜中目を不合
一同廿四日南東に黒雲如前午刻少々鳴動未ノ中刻自庄内御飛脚着道中様子承候得ハ昨晚栗
橋より灰降に逢候由申候跡之儀ハ如何御座候や不存旨申候夜二入酉ノ中刻余程地震有之並
夜中少々震動雷折々鳴り丑之刻少々地震有之右ハ伊豆之大嶋ノ山焼ル共申候

「鶏肋編卷六十九より」
山焼ル共申候

覺

庄内藩の記録 I
(鶴岡市郷土資料館)

一霜月廿三日午ノ中刻震動有之戸障子鳴ル其間半時程也未ノ刻南東より靈(異か)雲起り西
北ハ晴天その際日々うつり殊の外光り諸人目を驚カス且以雷なり右之雲西北之方ニ覆イ同
中刻より灰降ル其色鼠色也降初二は雷かと存候身にかゝり灰を見候へハ灰ニ而御座候夜ニ
入候而は黒キ焼砂ふる戌刻晴ル然共南東之方ニ黒雲有暮より翌明方迄震動不止戸障子ニ闇
キ鳴動キ夥敷諸人夜中目を不合
一同廿四日南東に黒雲如前午刻少々鳴動未ノ中刻自庄内御飛脚着道中様子承候得ハ昨晚栗
橋より灰降に逢候由申候跡之儀ハ如何御座候や不存旨申候夜二入酉ノ中刻余程地震有之並
夜中少々震動雷折々鳴り丑之刻少々地震有之右ハ伊豆之大嶋ノ山焼ル共申候

これは庄内藩江戸屋敷に勤める峰岸忠右衛門という藩士が宝永の噴火について書きとめ
たもので、国許(鶴岡)から来た飛脚が栗橋辺りで降灰に遭遇したと語ったことが記されて
いる。この頃、庄内藩は江戸と国許(約百二十二里九丁)の間に、月三度の飛脚を使ってい
た。いわゆる三度飛脚で、およそ七日間を要したと言われている。

(山形県史 資料編五 鶏肋編上)

二
四

一鶏肋編卷百五十より」

(山形県史 資料編六 鶏肋編下)

『鷄肋編』

コラム

江戸時代になると「田宮町」と呼ばれ、慶安二、三年

回廊所
カツテ
幸ふ
を
候

(幸手市史 通史編Ⅰより)

武品崎郡越谷村

産社祭礼帳

中新田

承応三年（一六五四）正月二十日

享保五年（一七二五）

宝永四年（一七二七）二月五日
此年十一月大砂降る

越谷越巻村の記録
(越谷市立図書館)

「産社祭礼帳（うぶしやさいれいちよう）」

宝永四年亥二月五日

嶋村 六郎右衛門

此年十一月大砂降る

同断 鋪野 弥兵衛

(越谷市史四 史料二)

綾瀬川に面した大字越巻村中新田（現在の新川町）に、承応三年（一六五四）から現在まで書き継がれている「産社祭礼記録帳」がある。その内容は承応三年以降施行されてきた産社祭礼を中心とした記録であるが、初めの内は祭礼執行の期日、執行に際しての集物として年番にあたった当番者の氏名のみが連記されていた。この間、特別な変革等の記録が簡単に付記されていることもあるが、享保期（一七一五〜）以降は年内に発生した顕著な事象が豊富に集録されている。この記録の宝永四年に右のような文書がある。

祭礼の期日が宝永の四年には二月五日（九日か）であり、年番にあたった当番者が嶋村六郎右衛門および鋪野弥兵衛の兩名で、この年に発生した特別な出来事として噴火による降灰が十一月にあったことを記録している。三寸即ち七〜八センチだが大量の降灰である。埼玉県下の噴火の記録に具体的な数字が出てくるのはこの越巻村の産社祭礼帳だけであり、貴重な記録である。

注記・嶋村、鋪野は近世初頭の越巻村新田開発における最初の移住者。

八潮西袋村の記録 (八潮市立資料館)

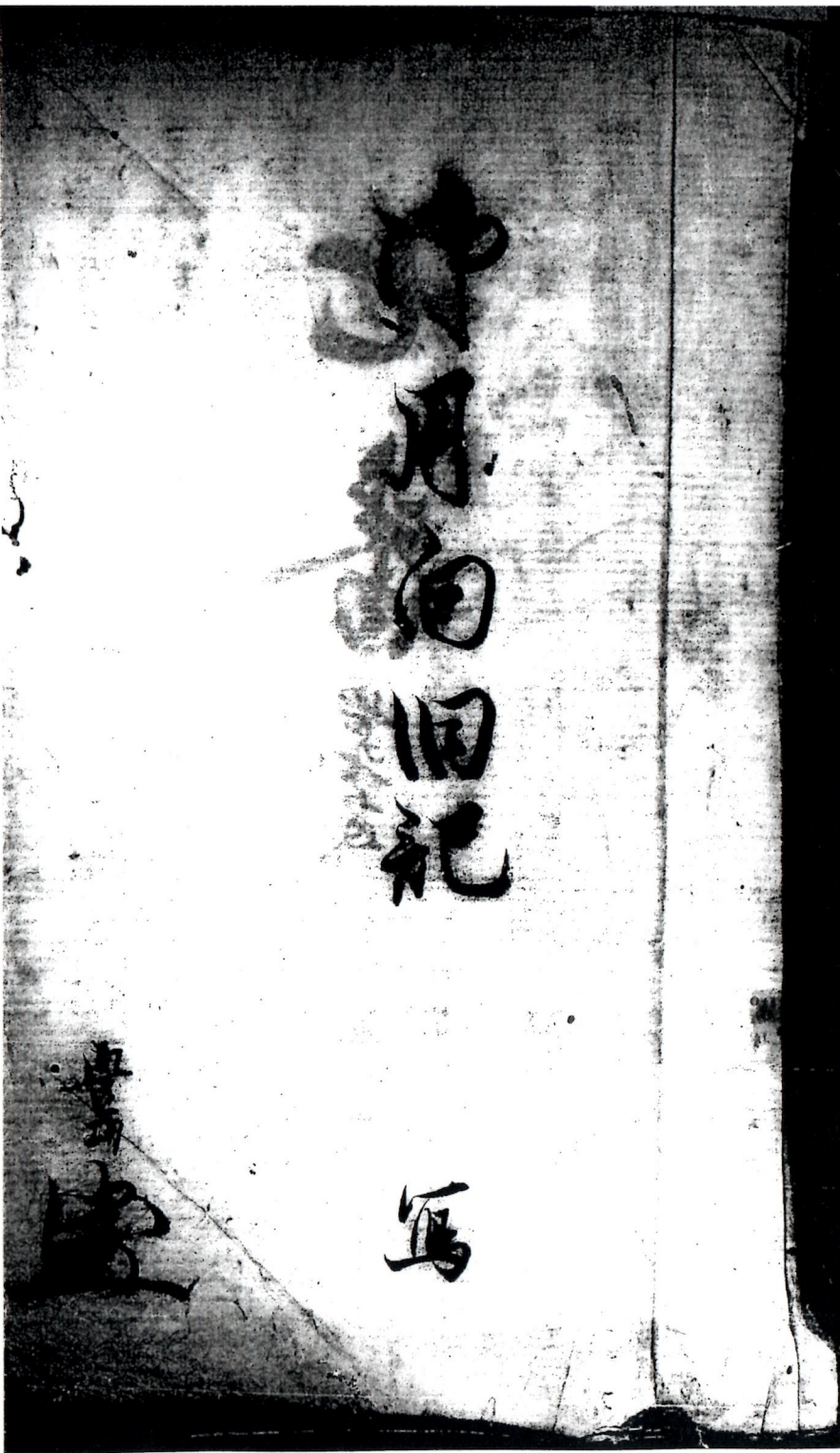
「御用向旧記留帳」

去ル廿三日富士山焼候ニ付江戸表焼砂降候、就夫近在之儀もいつれの村迄砂灰降候哉、尤降留り候を厚サ何程有之哉可申上旨江戸より申来候間、其元村々江何日より砂降候而厚サ何程溜り候と申儀、此廻状之村下ニ付紙致右之分書付名主名所記印判いたし可被相返候
九月廿七日

清太夫

(八潮市史 史料編近世Ⅱ)

江戸後期の寺子屋師匠で、八潮西袋村(現在の八潮市西袋)の名主であった小澤兵右衛門(二七八六〜一六五五)が集めた書物や絵図類が「綾瀬館文庫」として残されており、その中の「御用向旧記留帳」の宝永四亥年にこの文書がある。これは宝永噴火の後、村々に降灰の状況(降灰の有無、場所、厚さ)を調べて報告提出するよう名主宛幕府からの調査依頼である。幕府は富士山周辺の災害復旧に追われる中、江戸周辺の災害調査にも着手していたことがこの文書から知ることが出来る。(清太夫)は八条領の名主名、九月廿七日の日付はおそらく書き写した際の誤記だろう。このような降灰調査がどの範囲まで実施されたのか、又、「産社祭礼帳」に記されている降灰記録と越巻村にもきたであろうこの調査依頼との関係は不明である。



宝永噴火の概要

宝永噴火は宝永四年十一月二十三日（二七〇七年十二月十六日）の朝、十時頃、二度の大きな地震の後、六合目付近で大量の火山礫、火山灰（古文書では焼け石、焼け砂）を空中に放出する爆発的噴火が始まり、十二月九日に至るまで十六日間、活動は続いた。最初は粘性の大きい高熱の白色軽石が吹き上げられ、やがて黒色のスコリア（岩滓）を噴出した。噴火のクライマックスは最初の三日間ほどであり、その後の噴火は散発的で小康状態が長く続き、噴火末期に至って再び激しさを増したようである。その量はマグマ量に換算して七億トンと言われ、その大部分は成層圏の西風に乗って東方に流れ、駿河、相模、武蔵一帯に降灰による未曾有の被害をもたらしたのである。

被害は特に駿河国駿東郡、相模国足柄郡（小山町、御殿場市）に集中し、降灰の深さは須走で一丈三尺（三・九メートル）、御殿場、小田原で三尺（九〇センチメートル）、秦野で二尺（六十センチメートル）余、藤沢で八寸（二十四センチメートル）、江戸で五寸（十五センチメートル）と記録されている。

また降灰は田畑に直接被害を与えたのみならず、酒匂川に流入して川底を押し上げ、大雨とともに足柄（小田原）平野に洪水による二次災害をもたらしていった。この降灰被害に対し小田原藩一〇四か村四千人の農民は幕府に救済を求めるべく訴願出府を決行した。幕府は小田原藩の自力復旧を困難と認め、藩領のうち駿東・足柄両郡で九〇か村、石高五万六千石余を取り上げて幕領とし（美濃・播磨両国の替地を給付）、関東郡代伊奈忠順の手で復旧普請にあたらせた。そしてこの資金にあてるべく幕府は全国に対して石高百石につき金二両の国役金を賦課し、計四十八万両余を得た。しかし実際に普請に投入されたのは六万両余にすぎず、残りは赤字に苦しむ幕府財政の補填にあてられたものと思われる。当地の降灰除去作業は予想を超える困難なものであり、伊奈忠順の指揮の下、全郡を挙げて田畑の復旧に取り組んだが容易に進捗せず、噴火から十年経た享保元年（一七一六）に復興のめどのついた駿東郡三十二か村、石高六三九〇石余のみが小田原藩領へ戻り地となった。足柄郡諸村は依然として幕領にとどまり、延享四年（一七四七）、天明三年（一七八三）の二次にわたってようやく復旧している。

富士山の南東斜面、遠くからでもこぶのように見える宝永山（二六九三メートル）は噴火の際に地下に埋まっていた古い地層が持ち上げられて小山になったものと思われ、また宝永火口は宝永山の脇にあり、大小三つの火口が折り重なるように北西―南東方向に並んでいる。一番大きい第一火口は長径千三百メートル、短径千メートルの長円形で、富士山頂の火口より一回り大きい。

宝永山という名称については噴火の翌年、一七〇八年六月、須走浅間神社主小野民部より出された幕府への上申書に《宝永山南之方、今に至るも少し焼申候、》とあるので、まもなく命名されたものと思われ、六ヶ月過ぎてもまだ少しの噴煙が残っていたようである。

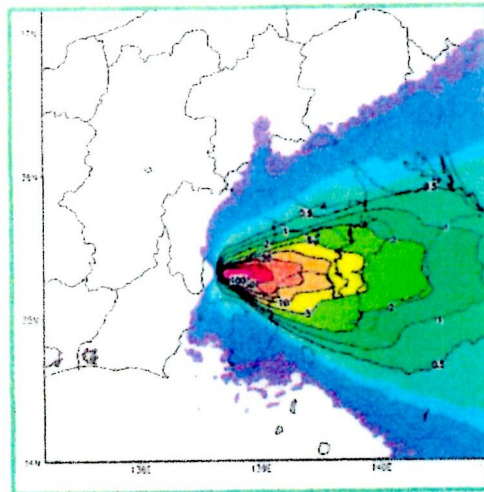
富士山の有史以降の主な火山活動

西 暦	活動の種類	記 録 (出 典)
7 8 1 年 800~802年	噴 火 延暦噴火	灰を降らせ、木葉が枯れてしまった。(続日本記) 噴石が道路をふさいだため、足柄道を廃し箱根路を開く (日本紀略)
864~866年	貞観噴火	甲斐国、大噴火の惨状を報告する。(日本三代実録)
9 3 7 年	噴 火	甲斐国、神火が湖を埋めた旨を報告する。(日本三代実録)
9 9 9 年	噴 火	富士山焼ける。太政官何の祟りか占わせる。(本朝世紀)
1 0 2 0 年	噴火と火映	頂上から煙り、夕暮れに火が燃え立つ。(更級日記)
1 0 3 3 年	噴 火	駿河国、去年12月16日の噴火を報告。(日本紀略)
1 0 8 3 年	噴 火	富士山焼け燃える。(扶桑略記)
1 4 3 5 年	噴 火	炎が見えた。(王代記)
1 5 1 1 年	噴 火	河口湖で異様な鳴動が聞こえ、鎌岩が燃えた。(妙法寺記)
1 7 0 7 年	宝永噴火	宝永東海地震の49日後から爆発的な噴火。(史料多数)

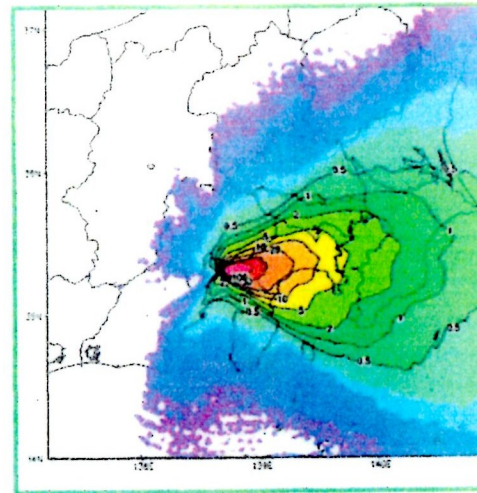
(富士火山を知る：富士北麓住民ガイドブックより)

下の図は、過去45年間の上空10,000mの風向・風速のデータをもとに、大規模噴火時（宝永噴火）の、季節ごとの特徴的な降灰分布を示しています。

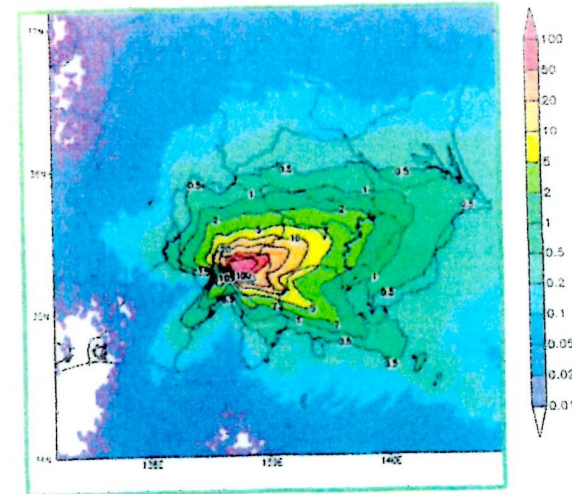
冬（参考：1月）の降灰分布



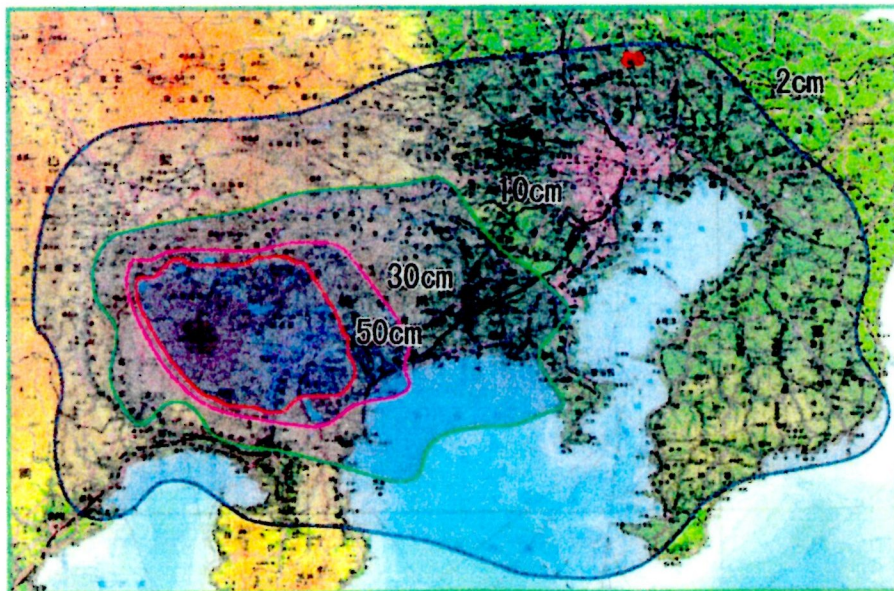
春秋（参考：4月）の降灰分布



夏（参考：8月）の降灰分布



下図は、年間を通して降灰の影響を受ける範囲を示したものです。



降灰予想分布図

富士山ハザードマップ検討委員会
(2004)

4. 越谷の張子

高崎 力

越谷というと、「達磨」の産地としては、有名ですが、張子人形が作られていることは、あまり知られていません。

ところが、張子人形も、船渡、下間久里、大沢、袋山、砂原などで作られているのです。

船渡で作られたものは、別名を「亀戸張子」ともいわれ、あのウソ替え神事で有名な亀戸天神でお土産として売られていました。「江戸情緒を今に伝える粹な張子」と民俗学の専門家・斉藤修平さんなども絶賛されていたもので、置物も吊るし物も首が動くように作られていました。種類は20種類くらいあって独特の彩色と、とぼけた味の顔が魅力でした。松崎久男さんが作るのをやめられたのは大変残念なことです。

砂原のものは、岩槻の第六天の門前で売られていました。天狗と狐の2種類があつて、小さい方の天狗と狐は顔だけの達磨のようなもので、顔に紐を通す穴があいていて畑に吊るしておくとか瓜を盗まれないとの言い伝えがありました。

ほかには、西新井大師や羽田穴森稲荷などでも売ったようです。

張子人形の作り方は、達磨と同じように、木型に紙を張り付け、その上にツノマタをまんべんなく塗り、和紙を重ねて張ってゆくものです。

技術の伝承は、地域というより、特定の家筋によって行なわれてきたといえましょう。それだけに、技術を受け継いでいる人数が少なく、あつという間に「〇人形」が絶えてしまうといったことが起こってしまいます。

いま、この越谷の張子人形をお持ちの方はぜひ、「もう二度と作られない」郷土の産物を大切に保管いただき、ぜひ、公開もお考えいただきたいと思います。

船渡



砂原



高崎力(つとむ)氏所蔵

5. 越谷型青面金剛像庚申塔

秦野 秀明

「六臂」の青面金剛像庚申塔は、中央の手(第一手)の印や持物の違いで、一般的には「合掌型」と「剣人型」に分類される。

中山正義氏は、この分類に当てはまらない「合掌型」でありながら「人身(シヨケラ)」を持つ「岩槻型青面金剛像庚申塔」の存在を報告した⁽¹⁾。

その報告によると、「持ち物」が十一種類、「三猿の配列」が五種類、「総数」が七十一基、「造立年代」が元禄元(一六八八)年から享保十九(一七三四)年までである。さらに、それぞれ二基(合計四基)の例外を除けば、「邪鬼」が横に臥さずに正面を向き、「三猿」は横向きではなく全て正面を向いている⁽²⁾。

越谷市内に存在する「岩槻型青面金剛像庚申塔」は、

- ① 野島五番…正徳三(一七一三)癸巳年十一月吉日 造立 野島 久伊豆神社⁽³⁾。
 - ② 大里四番…正徳四(一七一四)甲午十一月吉祥日 造立 大里 秀藏院跡⁽⁴⁾。
 - ③ 小曾川六番…正徳四(一七一四)甲午天十一月 造立 小曾川 慈眼寺跡⁽⁵⁾。
 - ④ 大林六番…享保五(一七二〇)庚子年九月吉祥日 造立 大林 香取神社⁽⁶⁾。
- である。

しかし、越谷市内には「合掌型」で且つ「人身(シヨケラ)」を持ちながら、享保十九年(一七三四)以降の造立で、「邪鬼」が横に臥して正面を向き、「三猿」は中央の猿以外の左右の猿が正面を向いていない二基の青面金剛像庚申塔が存在する。

- ① 小曾川十四番…宝暦四(一七五四)戊天十一月吉日 造立 小曾川 F家側墓地⁽⁷⁾。
 - ② 恩間十四番…宝暦五(一七五五)亥天九月吉日 造立 恩間 勢至堂⁽⁸⁾。
- である。尚、この二基は中山氏の報告にも含まれていない。

ゆえに筆者は、小曾川十四番、恩間十四番の二基を、「岩槻型青面金剛像庚申塔」の「亜型」である「越谷型青面金剛像庚申塔」として、ここに発表報告する。

- (1) 中山正義(一九八八)「岩槻型青面金剛像について」『野仏』一九・二―四
- (2) 中山正義(一九九七)「一九九七年十一月版 岩槻型青面金剛像一覧表」
- (3) (8) 越谷市立図書館に所蔵されている加藤幸一氏による越谷市内の石塔・石仏の悉皆調査の報告書より「番号等」を引用した。この場を借りて御礼申し上げる。

「岩槻型」青面金剛像庚申塔」

①野島五番…正徳三(一七一三)癸巳年十一月吉日 造立
野島 久伊豆神社 「舟型」③

持ち物	
剣	人
合掌	
矢	弓

「邪鬼」は、横に臥さず、正面を向き、二手で踏ん張る。
「三猿」は、全て正面を向き、向かって左より口・耳・目を塞ぐ。

②大里四番…正徳四(一七一四)甲午十一月吉祥日 造立
大里 秀蔵院跡 「舟型」④

持ち物	
剣	人
合掌	
矢	弓

「邪鬼」は、横に臥さず、正面を向き、二手で踏ん張る。
「三猿」は、全て正面を向き、向かって左より口・耳・目を塞ぐ。

③小曾川六番…正徳四(一七一四)甲午天十一月 造立
小曾川 慈眼寺跡 「角柱型様特殊型」⑤

持ち物	
剣	人
合掌	
矢	弓

「邪鬼」は、横に臥さず、正面を向き、二手で踏ん張る。
「三猿」は、全て正面を向き、向かって左より口・耳・目を塞ぐ。

④大林六番…享保五(一七二〇)庚子年九月吉祥日 造立
大林 香取神社 「駒型」⑥

持ち物	
人	剣
合掌	
矢	弓

「邪鬼」は、横に臥さず、正面を向き、二手で踏ん張る。
「三猿」は、全て正面を向き、向かって左より口・耳・目を塞ぐ。

「越谷型」青面金剛像庚申塔」

①小曾川十四番…宝暦四(一七五四)戊天十一月吉日 造立
小曾川 F家側墓地 「駒型」⑦

持ち物	
剣	人
合掌	
矢	弓

「邪鬼」は、横に臥して、正面を向く。
「三猿」は、中央は正面を向き、左右は中央を望んで横を向き、向かって左より口・耳・目を塞ぐ。

②恩間十四番…宝暦五(一七五五)亥天九月吉日 造立
恩間 勢至堂 「駒型」⑧

持ち物	
剣	人
合掌	
矢	弓

「邪鬼」は、横に臥して、正面を向く。
「三猿」は、中央は正面を向き、左右は中央を望んで横を向き、向かって左より口・耳・目を塞ぐ。

③小曾川十四番…宝暦四(一七五四)戊天十一月吉日 造立
小曾川 F家側墓地 「駒型」⑨



(2012・11・05撮影)

14・小曾川 青面金剛像庚申塔

越谷市立図書館に所蔵されている
加藤幸一氏による越谷市内の
石塔・石仏の悉皆調査の報告書より引用



5の付論「岩槻型青面金剛像庚申塔」の石工

中山正義(一九八八)「岩槻型青面金剛像について」『野仏』一九二二—四

において、以下のように述べられている。

「前略」それとも単に石工の創作が盛況をみたのだろうか、しかし四十年余の儚い流行の型態ではあった。「後略」

中山氏(一九八八)(一九九七)によつて報告された「岩槻型青面金剛像庚申塔」の造立年代は、元禄元(二六八八)年から享保十九(一七三四)年までである。

元禄元(一六八八)年から享保十九(一七三四)年までは四十六年間あり、一人の石工が二十歳より創作を始めたと仮定すれば、四十六年間に渡り創作を続けた場合には六十六歳となる。

ゆえに、享保十九(一七三四)年を最後に「岩槻型青面金剛像庚申塔」が存在しなくなる事実は、一人の石工が創作活動を行う期間としては、妥当な範囲なのではないだろうか。

つまり、さいたま市岩槻区を中心に存在する「岩槻型青面金剛像庚申塔」は、実は、一人の石工によつて作られたのではないかと推測される。

「小曾川十四番…宝暦四(一七五四)戊天十一月吉日造立の青面金剛像庚申塔」や、「恩間十四番…宝暦五(一七五五)亥天九月吉日造立の青面金剛像庚申塔」の造立年代である宝暦四(一七五四)年や、宝暦五(一七五五)年は、一人の石工によつてそれぞれ八十六歳、八十七歳となり、創作活動を行う年齢としては少々厳しいものがある。

つまり、「岩槻型青面金剛像庚申塔」を創作した石工とは、別人の可能性が高いと推測される。

②恩間十四番…宝暦五(一七五五)亥天九月吉日 造立 恩間 勢至堂 「駒型」(8)



(2012・3・1撮影)



越谷市立図書館に所蔵されている
加藤幸一氏による越谷市内の
石塔・石仏の悉皆調査の報告書より引用

6. はとバスが越谷市内を走る

原田民自

「はとバス」は、戦後間もない昭和二十四年（一九四九）三月から東京定期観光バスの運行を始め今年で六〇年以上の歴史のあるバス会社です。知人や地方の方に東京を案内するには良いイメージがあり、みなさんも一度は利用されたのではないのでしょうか。

「はとバス」の観光コースは、時代の波に乗り遅れまいと次々と生み出される中で、数十年続いている人気のコースもあれば、数回運行されたのみで忘れ去られるコースもあるという。昭和三三年（一九五八）三月から定期観光として初めて東京を離れ郊外へ進出。鶴岡八幡宮や鎌倉大仏などの名所旧跡コースは現在でも続いている。また庶民にとって「たかねの花」の料理などが大衆料金で楽しめるコースも組み込まれた。

そのような中で昭和三八年（一九六三）二月に越谷市内が観光コースになったという新聞記事を見つけた。当時それほど認知されていない、庶民には「たかねの花」で食道楽が秘かに味わう「鴨すき焼き」を昼食に取り入れたもので、市内でも歴史と伝統のある柳町の「大黒屋」に白羽の矢が当てられた。

「はとバス」の越谷市内遊覧は「郊外グルメコース」として昼食に「鴨すき焼き」を味わい、梅で名高い浄光寺を散策。明治中期に年間四万個のだるまが出荷されたという名産の「だるま作り」を見学しての料金は大人千百円、子供九〇〇円だった。決して高くないと思うが人気のほどはどうだったのだろう。

名所・越谷を紹介

観光バスがコースに指定

越谷市が観光バスとして紹介されることになった。これは東京都内の観光バスを運営している「はとバス」がコースに繰り入れるもので、午前八時に東京・新宿駅を出発、千葉県野田市を経て越谷市内で名物のかもスキヤキの昼食をとり、梅で名

昭和 38 年（1963）2 月 2 日 埼玉新聞



昭和 38～39 年導入のスーパーデラックスバス 越谷市内を走ったバス？



はとバスが訪れた中村ダルマ店（写真は昨年） 大黒屋の囲炉裏端で鴨すきを食す

越谷名物の「鴨すき」で昼食



柳町 大黒屋

2月～3月にかけて「浄光寺」は梅の盛りを迎える



浄光寺



越谷グルメコース料金
大人千五百円 子ども九百円

7. 200年前の越谷―俳画の世界―

宮川 進

今から約200年前の文化12（1815）年に描かれた「日光近傍絵図」の越谷の図です。

いま、32万人の市民のいる越谷市の当時の風景を描いた絵です。

元荒川でしょうか。古利根川でしょうか。大きな河。荷物をいっぱい積み込んで、一生懸命、竿を送っている船頭さん。欄干もない橋。手前には槍を持った武士でしょうか。そして、向こうに見える山は筑波山でしょうか。

俳句は書かれてはいませんが、まさに俳画の世界です。

賑わった日光道中ぞいの越谷宿の近くには、このような世界が広がっていたのではないのでしょうか。

同時に描かれた草加の絵では、駕籠での旅、大きな荷物を担ぐ人などが描かれ、「中田から古河を望む」絵では遠くに古河城が書かれています。

栗橋堤では大河・利根川が描かれています。

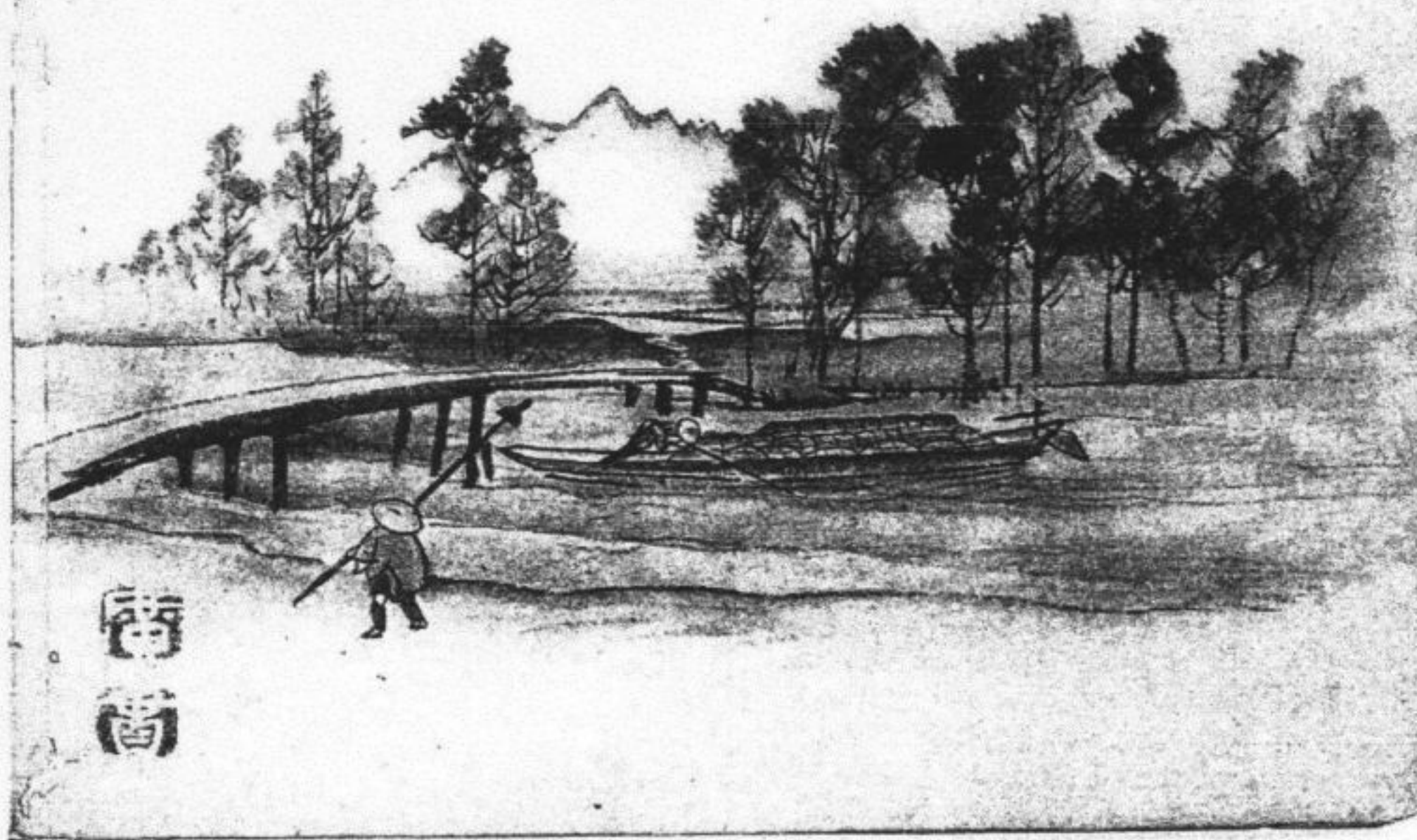
もう一つの「栗橋御関所」では、どちらかの大名行列が、いま、河を渡ろうとしているようです。

「日光入口」にも、大名行列が描かれ、街の賑わいが、かいま見えます。

「鉢石上水」では、いまもある神橋や一般の道の橋が、描かれています。

当時の日光道中のようなすを書いたこの絵の作者は、残念ながら、わかっていません。有名な画家ではなかったのですが、彼の優れたスケッチの力は、あまりほかに例のない、日光道中のありさまの貴重な記録となっています。

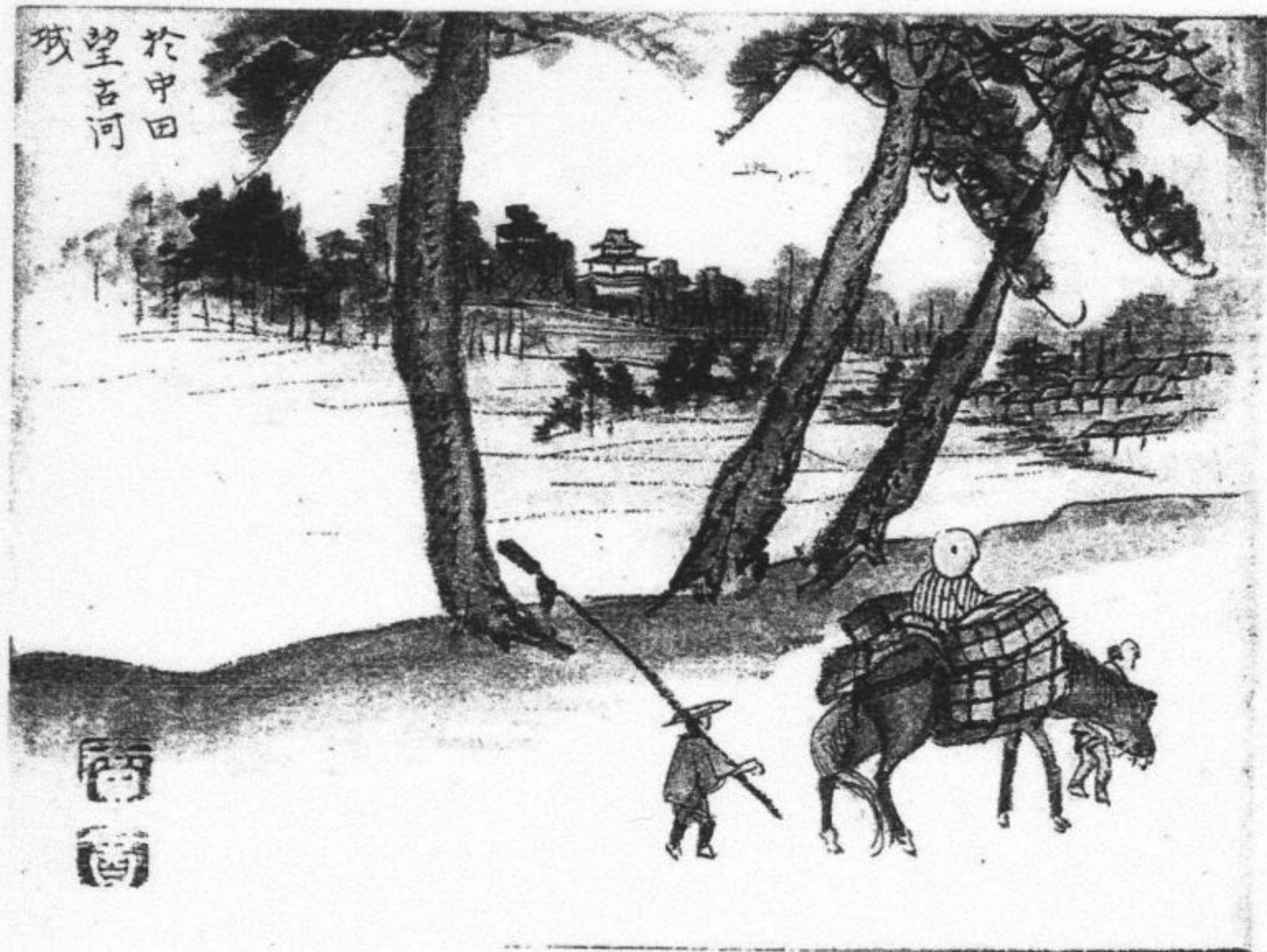
越
吾



州
加



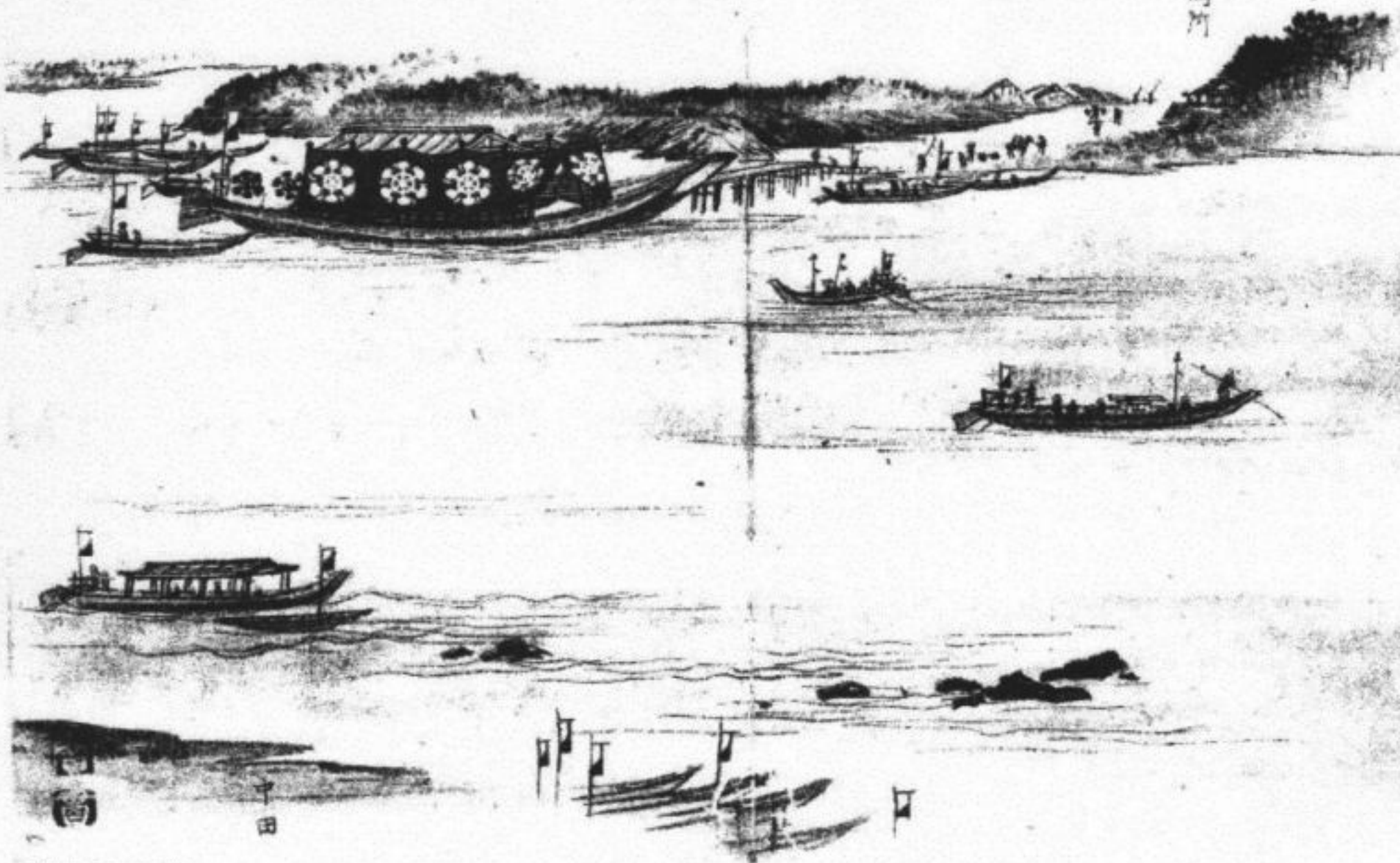
於中田
望古河
城



栗橋
堤



東橋御所



中

日光入口松原町
御神忌有

高札場

從松原町望

御幸町鈴石町圖

大真那子山

外山

又珠





**特定非営利
活動法人 越谷市郷土研究会**

「NPO 法人 越谷市郷土研究会」の事務所は上記のチャレンジショップ「夢空感」内です。
月曜日は定休日。事務所の電話及びFAXは048-962-2651。お気軽にお越し下さい。